

## 2月例会 阿南幸子会員 卓話

2020年4月、日野原重明塾「新老人の会」大分は創設2年目を迎えることになりました。身の引き締まる思いです。

初年度は、日野原重明先生に託されたミッションを如何に受け継ぐべきかを模索した一年でありました。

初年度の行事は例会6回。4月はミッションを如何に受け継ぐか、6月と8月は戦争と平和を考える勉強会。9月は特別例会で大分大学医学部の加藤教授による勉強会「リンパは流れる」12月はクリスマス例会。明けて2月例会では阿南幸子会員による卓話「日野原先生の思い出」を伺い、先生をより近くに感じる事が出来ました。

その他特筆すべき行事は8月31日、日野原重明塾「新老人の会」大分フォーラム2019として群読・音楽・舞踊で綴るドキュメンタリー「対馬丸からのメッセージ/命」をiichiko総合文化センター「音の泉ホール」で開催。日野原先生が激賞されただけあって会場一杯の大盛会でした。またクリスマス例会に引き続いては、大分の誇る講談師一龍斎貞弥さんの独演会。

10月26日には宇佐・スッポン料理と映画鑑賞のバス旅行を開催。寛いだ時間もありました。

この一年を振り返って、塾の在り様が見えてきたように思われましたが、此処にきて、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延。生命の危険は勿論、世界経済への打撃も果て知れず、戦争に例えるリーダーもあり、如何にして人知を尽くすべきかが問われています。

時恰も地下鉄サリン事件から25年。当時の日野原先生の対応の素晴らしさを振り返って、先生ならどう対応されるでしょうか。私達は先生の残された教えに従って、新型コロナウイルス感染症の国際的な蔓延を食い止め世界平和を実現するための努力をせねばならないと心に誓ったところです。

いち早く2月の会報ネオ58号に新型感染症についての特集を掲載いたしました。小なりと言えども的確に対応して行きたいと考えています。



会場風景

## 聖ルカ看護を学ぶ 阿南 幸子 会員

1964年（昭39年）日野原先生53歳、内科の医長としてご活躍の年に私は聖路加看護大学の一期生として入学しました。先生から1年間、医学概論の講義を受け、4年間でアメリカ式聖ルカ看護をしっかりと学びました。

日野原先生は「医学と看護の2つを1つにして生きて来た」とおっしゃっているように看護教育においても第一人者でした。聖路加看護大学の設立、大学院修士過程の設置、2014年には聖路加国際病院と大学の一体化を目指して聖路加国際大学へと改名、2019年には先生の希望であった世界水準の公衆衛生大学院の設立を見届けて天国に召されました。

先生は入学してすぐの講義で学生も「マイ聴診器を持ちなさい。目と手、そして聴診器を使って心音を、呼吸音を聴きなさい。ナースは24時間患者さんのBed Sideにいるのですから、観察を十分にし、報告をして患者さんの状態を医師と共有することが大切です」入学したばかりの私達にはとても印象的でありました。

「Bed Side Nursing 24時間患者さんに寄り添うナースは、患者さんの人生・生老病死そのものに寄り添いサポートするのです。一生懸命学びなさい、そしてあなたの人生を見つけてなさい、一歩先を歩む人を見習いなさい」日野原先生はオスラー博士、又前学長、病院長の橋本寛敏先生を挙げておられます。

聖ルカ大学、病院では多くの事を学び経験しました。日野原先生は、成人病ではなく生活習慣病であることを早くから提唱、予防医学看護の必要性を提案して実施しておられました。

また、昭和29年から既に人間ドックの病棟がありました。二階のC病棟、学生は「どなたところ」とそっと見学に行ったものです。疾病予防、早期発見、早期治療の取り組みでした。

2015年、日野原先生103歳の時に「聖ルカの間ドックで若返り」とドックを受けておられます。また当時、海外旅行に行く方々は聖ルカの渡航内科で診察を受け、ワクチン注射などを受けて海外へ、これも外来実習でのめずらしい経験でした。Bed Side Nursing、ホスピタリティー、ホスピスケア、ターミナルケア、など新しいことを50年前にたくさん学びました。

「老いを創める」日野原先生の著書です。

「生きることも、老いも、病も、死さえもデザインしなさい、創りなさい。140億の脳細胞を全活用しなさい、勉強しなさい、創めることに年齢も遅いことはありません」4年間みっちり日野原先生から医学と聖ルカ看護を学びました。

今年は卒業して52年、後期高齢者です。まだまだ頑張ります。

恩師日野原先生に、聖ルカに感謝です。そして皆様の前で講話させて頂きましたことにお礼申し上げます。



阿南幸子会員

2月15日（土）例会

## 阿南幸子会員による卓話「日野原重明先生の思い出」

2月の例会は聖路加看護大学一期生で塾会員の阿南幸子さんに日野原先生の思い出や人となりをお話し頂きました。先生ご逝去の際に聖路加病院関係者により撮影された告別式の映像の上映もあり、日野原先生のエピソードをリアルに感じるひと時でした。

### 日野原先生が憧れたオスラー博士のこと

日野原先生は39歳の時、憧れの医師ウィリアム・オスラー博士が活躍したアメリカへの留学機会を得られます。阿南さんのコメントにもオスラー博士のお名前が出ていました。日野原先生の精神を学ぶにあたり大切なことなので、ここでオスラー博士のご紹介をいたします。

オスラー博士は1849年にカナダのトロント市近くにある小さな村の貧しい牧師の家に生まれ、努力の末に医師になりました。若くしてアメリカのペンシルベニア大学で内科教授として医療に専念した後、ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に医学部と病院を設立し「医学は実際に患者の傍にいて患者から学ぶものだ」という臨床医学の教育を確立するなど新しい医学を根づかせた偉大な人物です。1919年に亡くなりました。

たが、その内科学の教科書は世界中で読まれ、日野原先生も深い感銘を受けておられます。

「医師は講義室よりも、病棟という現場でさまざまな患者さんと対面していく中で学び成長すると僕も思っていた。それなのに日本では講義中心の傾向があった」時代差で直接会うことは叶いませんでしたが、オスラー博士が説いた医師としてどう生きるべきかという心得は日野原先生の心に深く刻まれました。「病に苦しむ患者さんには忍耐強く優しく接すること。そして患者さんがひとりの人間であることを忘れてはならない。だから人間に対する愛情がなければ医師は務まらない」日野原イズムといわれる医師の精神にはオスラー博士の存在があることを先生は常に人々に伝えておられました。

事務局



阿南会員の蔵書を手にする出席者



記念撮影

## 2020年度 春の企画中止・延期のお知らせ

4月18日（土） 例会「皆で語り合おう日野原重明先生に学ぶ命の尊さ」

5月～6月 映像で学ぶ「日野原イズム」

心を潤す文化 一龍斎貞弥「二孝女物語」

上記のような行事を計画しておりましたが、新型コロナウイルスの蔓延で何れも集会が出来ないため中止並びに延期することにいたしました。

その代替として電話、メール、文書の送付などでの情報の共有を考えております。ご迷惑やご不便をお掛けしますがよろしくお願いいたします。

**2020年主要企画＝「新老人の会」大分10周年記念・平和推進事業  
語りと音楽、舞踊で綴る「対馬丸からのメッセージ」沖縄公演**  
この公演に関しても開催時期を検討中です。決定次第ご連絡いたします。

## 編集後記

新年度最初の会報ネオ59号をお届けいたします。

昨年12月に始まった新型コロナウイルス感染症が、瞬く間に全世界に拡散大変なことになってしまいました。

今はもう何とか自分たちに禍が及ばない様にマスクして動かない様にするしか方法がないとのこと。病気もさることながら、社会生活の制限で生きて行くことも儘ならない事態に立ち至ってしまいました。

敵わぬ時の神頼みとお祈りするしかないのでしょうか。いえ、そうでは無くこれ迄何百万年もの間、幾つもの難関を切り抜けてきた人間の英知を信頼して私たちなりに出来ることを考え、全世界が協力して立ち向かうことこそが在るべき立場でありましょう。

日野原重明先生は困難な問題にぶつかった時に、問題解決ができる様な能力は与えられていない。本当に学ぶべきなのは問題とどう取り組むか、どういう戦略を立てるべきかということであるとされました。25年前、1995年3月20日に起こった地下鉄サリン事件の際、先生の取られた対応の見事さ。私たちは学ばねばなりません。

そして、今がまさにその時であります。学者はワクチン、治療薬の開発。政治家は拡散防止の方策そして人々の生存権維持への施策。我々庶民はそれぞれの立場で何が出来るかを考え実行することが大切でありましょう。

文明を誇った人類に振り掛かった有史最大の難関を克服するために、世界が協力して英知の限りを尽くさねばならない時です。

私たち個人もささやかな英知を振り絞らねばならない正念場と覚悟しています。